

(研究主題)

「視点」と「問い」の質を高めることで
追究する子どもを育てる
— 「社会的な見方・考え方」を働かせた
社会科の授業づくり — (副題)

(学校名) 兵庫県佐用郡佐用町立利神小学校
(役職・職名) 校長 桑田 隆男

1 はじめに

昨今の社会情勢は大きく変化しており、情報化やグローバル化といった社会の変化が予測を越えて加速度的に進展し、今後は社会や生活がより一層大きく変化していくものと予測される。このような変化の中で生きていくために、児童一人一人が、これからの社会の担い手として主体的に社会や自分の人生に向き合い、それらをより豊かにしていくことが求められている。そこで、本校では昨年度より児童一人一人がよりよい社会の担い手となるよう社会科の研究を深めることにした。

まず、平成29年度末に3年生から6年生の児童の実態を社会科アンケートで把握した。

【肯定的な回答率の高かった設問】

設問②「社会科の授業はわかりますか」 88.3%

設問④「タブレットやインターネット、本やパンフレットで調べることは好きですか」 85.0%

設問⑤「地域の人と一緒に学習をするのは好きですか」 85.0%

設問⑨「地図帳を使って日本のことや世界の国などを調べたりするのは好きですか」 80.0%

【肯定的な回答率の低かった設問】

設問⑬「友だちの考えに対し自分の意見を言ったり質問したりできますか」 60.0%

設問⑦「写真やグラフを見て不思議だとか何かを調べたいという気持ちになりますか」 61.7%

設問⑪「図や写真、グラフなどの資料を使って自分の考えを説明できますか」 61.7%

設問⑫「自分の考えを文で書くことができますか」 66.7%

これらの社会科アンケートの結果から、利神小学校の児童は社会科の授業は好きで、授業も

理解している子が多いが、自分の考えを持ってそれを説明したり発表したりすること、資料を読み取り、自分の考えを持つことや文章で表現することなどは得意ではないことがわかった。

2 研究テーマ

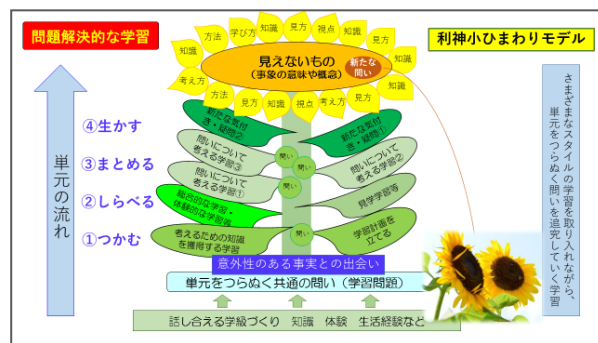
そこで、児童の実態をふまえて、研究テーマを『視点』と『問い』の質を高めることで追究する子どもを育てる」とし、サブテーマを～「社会的な見方・考え方」を働かせた社会科の授業づくり～と設定した。

3 「社会的な見方・考え方」を働かせた社会科の授業づくり

「見方・考え方」を働かせる社会科の授業づくりとは、「単元等の目標を実現するために、教材化の視点とともに、問いや資料、学習活動などを含めた問題解決的な学習の展開を工夫することである」と本校では定義している。

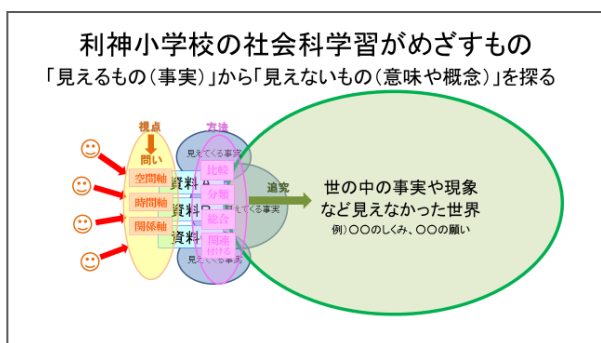
(1) 問題解決的な学習 (利神小ひまわりモデル)

そこで、問題解決的な学習の流れを「利神小ひまわりモデル (下図)」として考案した。



単元の導入場面で、意外性のある事実(資料等)との出会いにより、単元をつらぬく共通の問い(学習問題)を持ち、「①学習問題をつかむ」「②学習計画に従って、しらべる」「③調べたことをもとに話し合い、まとめる」「④学習成果を生かす」という単元の流れを設定した。

そして、単元の流れの中では、問いについて考える学習や見学学習、体験的な学習等の「さまざまなスタイルの学習を組み合わせながら、単元をつらぬく共通の問い（学習問題）を追究していく学習」に取り組むことにした。これらの学びを通して、概念をつかみ、さらにその中から「新たな問い（種）」が生まれ、それが次の単元や学びにつながっていく（花開く）という問題解決的な学習を作り上げていくことを全職員で共通理解した。



まず、資料から「空間軸」「時間軸」「関係軸」を視点として問いを引き出し、見えてくる事実を「比較」「分類」「総合」「関連付ける」などの方法をとって追究することにより、世の中の事実や現象などの見えなかった世界が見えてくるような授業づくりをめざした。

**小学校社会科における
追究の「視点」と「問い」の例**

考えられる視点例	視点を生かした考察や構想に向かう「問い」の例
空間軸 ○位置や空間的な広がり 地理的位置、分布、地形、気候、環境、範囲、地域、構成、自然条件、社会的条件、土地利用 など	・どのように広がっているのだろう。 ・なぜこの場所に集まっているのだろう。 ・地域ごとの気候はどのような自然条件によって異なるのだろう。
時間軸 ○時期や時間の経過の視点 時代、起源、由来、背景、変化、発展、継承、維持、向か、計画、持続可能性 など	・いつどんな理由で始まったのだろう。 ・どのように変わってきたのだろう。 ・なぜ変わらずに続いているのだろう。
関係軸 ○事象や人々の相互関係の視点 工夫、努力、願い、業績、働き、つながり、関わり、仕組み、協力、連携、対策・事業、役割、影響、多様性と共生(共に生きる) など	・どのような工夫や努力があるのだろう。 ・どのようなつながりがあるのだろう。 ・なぜ〇〇と〇〇の協力が重要なのだろう。 ・どのように続けていくことがよいのだろう。 ・共に生きていく上で何が大切なのだろう。

考えられる視点の例としては、「空間軸」として、地形や気候、自然条件などの位置や空間的な広がり。 「時間軸」として、時代や由来、変化、発展などの時期や時間の経過の視点。 「関係軸」として、人々の工夫や努力、願い、つながり、しくみなどの事象や人々の相互関係の視点などに着目し、そこから生まれた問いを、比較、分類、総合、関連付けることにより、「社会的な見方・考え方」を働かせた社会科の授業づくりに取り組んだ。

(2) 地域教材の開発とその活用

児童にとって身近な地域の事象を学ぶことは、児童の関心・意欲を高めるだけでなく、地域を愛し、地域に関心を持ち続けようとする意欲を高めることに有効である。幸いな



ことに、平成29年10月に利神城跡が国史跡に指定されるなど、改めて「ふるさと意識の醸成」を町全体で叫ばれることになった。そこで、地域とともにある学校づくりの観点からこの機会をチャンスと捉え、積極的に地域教材の開発とその活用を進めてきた。

4 授業実践 (平成30年度の取り組み)

(1) 「工場ではたらく人々の仕事」 (3年)

3年生の「工場ではたらく人々の仕事」の学習で、地域教材「そうめん工場の仕事」を取り上げた。視点として、空間軸に着目したところ、分布、気候、自然条件などから、「そうめん工場が、なぜ、この場所に集まっているのだろう」という問いが出てきた。つまり、そうめん工場に適した立地条件に関する問いが引き出されたことになる。

授業展開の中で、児童は、どんなところにそうめん工場があるのかを地図で確かめながら発見し、それらを分類することで、揖保川流域にたくさんのそうめん工場があるということに気付いた。「なぜ、揖保川流域にたくさんのそうめん工場があるのだろう」という問いを考えていく中で、

- ・ 近くでそうめんの原材料である小麦や綿実油、塩が作られており、手に入りやすかった。
 - ・ 揖保川のきれいな水を利用した。
 - ・ 揖保川流域には、たくさんの水車があり、冬場に水車を利用し小麦を粉にすることができた。
 - ・ 冬、晴れる日が多い気候をうまく生かした。
- 等の事実を児童が見つけ出した。それらを関連付けて、問いに対する結論をまとめた。

さらに調べていくうちに、外国へ出荷しているという事実と出会った児童は、「なぜ外国にそうめんを出荷しているのだろう」という新たな問いをもち、発展的な学習へと展開した。



(2) 「水害にそなえて」 (4年)

佐用町では、平成21年8月に大きな水害が起こり、甚大な被害が出た。その水害の教訓を生かし、新学習指導要領における自然災害を扱った新単元として開発した。

視点として、空間軸に着目したところ、地形、気候、範囲、自然条件から「なぜ、平福でこのような水害が起きたのだろう」、「水害が引き起こされた原因は何だろう」という問いが引き出された。

また、関係軸に着目すると、工夫、努力、願い、連携、対策・事業、共生、安全の視点から、「どうすればこのような水害が起きた時、被害を最小限に抑えることができるのだろう」という問いも生まれた。

さらに、時間軸にも着目し、過去の水害を調べ、未来につなげるという取り組みにもつながった。これらの問いを結び付け、問いの構成表をもとに授業として展開した。

まず、防災フィールドワークで水害の被害が大きかった校区(平福地区)を調べ、実際に見て回った。

地域の方から説明を受け、ハザードマップに気付いたことを書き留めた。



被害が大きくなった原因を探り、被害を少なくするための地域や町役場の取り組みを調べることで、被害を最小限に抑える取り組みについて学んだ。

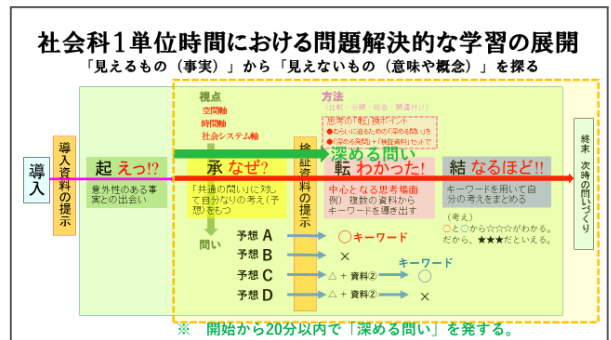
単元の終末(学習の成果を生かす)場面にお

いては、自分の住む家の周りを家族と一緒に実際に見て回り、MYハザードマップを作成することで、自分事として水害に備えるとともに、今、自分たちができることを考え、話し合った。

5 中心となる思考場面を生み出すために

昨年の取り組みの中で、「問い」を生み出すために一単位時間(45分)のうち15分も費やすという課題に突き当たった。また、本当に深めたい問い(本校では「問い」の質を高めるという観点から「深める問い」と定義)を発する時間が授業時間の後半、つまり、授業開始後35分~40分くらいになってしまい、じっくり考える時間がないという課題にも直面した。単元における問題解決的な学習の流れは定着してきたものの、一単位時間における問題解決的な学習の流れには課題が残った。

そこで、本年度は、下図のような一単位時間における問題解決的な学習の展開を考案した。



まず、前時に「問い」を作成することで、本時は「深める問い」を発するまで20分で展開できるように工夫・改善した。

前時に「問い」をつくることで、前もって教科書の内容に目を通して来るなど予習してくる児童が増え、見通しをもって授業に臨むという主体的な態度の育成につながった。また、「深める問い」についてしっかりと議論できる時間を生み出したことで、「深い学び」にもつながった。教師が児童の発言やつぶやきを問い返すことで、深めることが可能となった。さらに、「次時の問い」をつくることで、振り返りの視点まで生み出したことは大きな成果である。

『「視点」と「問い」の質を高めることで追究する子どもを育てる』という研究テーマを具

現化するような児童の姿が見え始めてきたことに確かな手ごたえを感じている。

このことは板書や学習ノートの構成にも良い影響を及ぼしている。中心となる思考場面を板書や学習ノートの紙面の2/3を当てるように変化してきた。それだけ「深める問い」を意識した授業展開がなされてきた証といえる。



板書から見えてきた中心となる思考場面の変容

6 社会科の学びを生かす取り組み

「利神小版 未来伝承プロジェクト」

本校では、社会科だけの学びに終わらせず、社会科の学びを生かす取り組みに重点を置いている。児童の「わかる」を「できる」に高めていくことが、児童の深い学びにつながるかと考えているからである。

一昨年より6年生は、歴史を学んだあとに、地域のボランティアガイドの方と宿場町「平福」の町を歩き、ARマチアルキというアプリを利用して、「ふるさと利神」を発信している。

AR マチアルキアプリは、スマートフォンやタブレットをかざすと、児童が作成し



た説明が浮かび上がる仕組みになっている。昨年は、6年児童がパンフレットを作成し、地域

住民や保護者、宿場町「平福」を訪れた観光客に「ふるさと利神」のよさを発信した。

児童が作成したマチアルキ画面

地域と学校が連携・協働し、「利神小版 未来伝承プロジェクト」として社会科の学びを生かした取り組みを引き続き地域ぐるみで推進していきたい。

7 まとめにかえて

今年7月、3年生から6年生に社会科アンケート（3回目）を実施したところ、平成29年度末調査において肯定的な回答率の低かった設問の結果は、以下のとおりであった。

設問⑬60.0%→67.9% 設問⑦61.7%→84.9%

設問⑩61.7%→66.0% 設問⑫66.7%→73.6%

上記の結果から、自分の考えを持って説明したり、発表したりすること、資料を読み取り、自分の考えを持つことや文章で表現することができるようになった児童が少しずつではあるが増えてきたことがわかる。

また、今回の調査で最も肯定的な評価が高かった設問は、設問②「社会科の授業はわかりますか」（92.5%）であった。また、伸び率の高かった設問が設問①「社会科の学習は好きですか」（75.0%→90.6%）と設問⑦「写真やグラフなどの資料を見て不思議だなとか何か調べてみようという気持ちになりますか」（63.3%→84.9%）であった。

この結果から本校において社会科を好きになり、わかるようになった児童が増えたこと、そして、資料を見て何か調べてみようと思う主体的な態度の見られる児童が増えたことがわかる。今回の取り組みを通して、「『視点』と『問い』の質を高めることで追究する子どもを育てる」という研究テーマに大きく近づいてきた。今後も引き続き研究を深めていきたい。

